「戯書の万葉仮名」以外の部分は、漢字かな交じり文で示してあるとのことです。(1)

では、ここで問題です。「色に山上復有山ば」の句は、どのように読むのでしょうか。「古絶句」における謎解きをすでにご存知の皆さんであれば、もうお分かりですね。そうです、「色に出(いで)ば」と読むのです。

それにしても、ここで注目すべきは、万葉人(まんようびと)の歌に「古絶句」における「山上復有山」の句が万葉仮名としてそのままの形で用いられていることです。このような形で文学作品に用いられていることから、この句がすでに、万葉人たちの間での共通の知識になっていたことを窺わせます。では万葉人は、この句の存在をどのような経緯で知り得たのでしょうか。男女の情愛を好んで和歌に詠った彼らのことですから、おそらくは『玉台新詠』を通してではなかったか、と思われます。

『玉台新詠』については、すでに幾つかの全訳本があります。(2) 皆さんも、おそらくは万葉人も読んだであろうこの本を読んでみられたらいかがでしょう。

【注】

(1) 作品番号一七八七「天平元年己巳冬十二月歌一首」。引用部分を全て万葉仮名で示すと以下のようになります。

毎見(みるごとに)　恋者雖益(こひはまされど)　色(いろに)二山上復(いで)有山者(ば)
一可知美(ひとしりぬべみ)　……

(2)『玉台新詠　上・中・下』(鈴木虎雄、岩波書店、岩波文庫)
『玉台新詠　上・下』(内田泉之助、明治書院、新釈漢文大系)
『玉台新詠』(石川忠久、学習研究社、中国の古典25)

辞書の星に宇宙を見る?!

法学部
中尾　浩

＊をつける規準

フランス語に限らないが、辞書にはたいてい＊がついている。平均して３千から４千語程度の語彙に＊がつけられている。そのほか、色刷りになっていたり、文字の大きさで表したり、それらを組み合わせている場合もある。これらの単語は「重要語」や「基本語」と辞書に書かれている。辞書によって呼び方はいろいろで、辞書を仔細に眺めていると、実はこの呼び名の違いの段階で、根本的な考え方の違いがあることがわかる。以下の４つのパターンが考えられる。

１：(誰かにとって) 重要であり、なおかつ基本的な語
２：(誰かにとって) 重要ではあるが、基本的ではない語 (つまり、難度が高い語)
３：(誰かにとって) 基本的ではあるが、重要ではない語
４：(誰かにとって) 基本的でもなく、重要でもない語

このうち、１が学習用辞書においてはもっとも理想的な語であり、４は本来＊がついてはならない語である (実は、４に該当するような語に＊がついていることがある)。最も多いのが、２と３である。これらは１のグレーゾーンに該当する語なので、どの程度１に近いか (遠いか) が辞書の善し悪しを分けることになるだろう。

＊のついた語を見ていると「誰にとって」基本なのか、「誰にとって」重要なのかが明確ではない事がよくある。日本語で考えてみよう。「かたつむり」はおそらくかなり基本的な語と言える。

子どもの絵本に登場する生物の定番であり、我が家の７歳と３歳の息子が持っている絵本のあちこちに出てくる。その意味では幼児期に獲得する語彙であり、大学生になって「かたつむり」を知らない人は、少なくとも愛大生の中にはいないはずである。

では、「かたつむり」が重要な語か、というと、少々ためらわざるを得ない。この冊子のかなり多くの読者は過去一ヶ月に「かたつむり」という語を一度も使っていないだろう。一ヶ月どころか、ここ二、三年使った覚えがない人だっているかもしれない。大学生になって、毎日のように「かたつむり」を使うのは、理学部生物学科でかたつむりを研究しているとか、かたつむり愛好会（？）の所属であるとか、よほど特殊なケースを考えないと、法学部や経営学部の学生がそんなにしょっちゅう「かたつむり」を使うことはないはずだ。また、この先、社会人になっても、それほど使う機会があるとも思えない。結婚して子供が生まれたら、しばらくの間は絵本の読み聞かせなどで使うと思うが、それもせいぜい７～８歳程度までだろう。

他方において、「簿記」「会計」「司法」「行政」などといった語は社会科学系の大学生にとっては重要な語だが、果たしてこれらが「基本語」であるかどうかは、即答しかねる。大学生にとってなら基本語であるが（大学生にとってこれ以上に難度の高い語彙はいくらでもある）、７歳の小学生にとっては基本的ではない。

このように、語彙の重要さや基本さは「誰にとって」、すなわち対象が存在しないと決まらない。

その意味では、辞書につけられた＊の重要性や基本性の規準は明らかに、その辞書の対象読者にあると考えざるを得ない。君たちが授業で使っている辞書はフランス語だろうと英語、ドイツ語、中国語、韓国・朝鮮語であろうと、使っている君たちこそが対象なので、君たちにとって基本的であったり重要な語に＊がつけられているはずなのである。

ところが、事はそれほど簡単ではない。

大学生にとって基本的な語・重要な語

先ほどの例をもう一度取り上げてみよう。「簿記」「会計」「司法」「行政」といった言葉はおそらく社会科学系の大学生にとって「基本」的であり、「重要」な語彙だろう。しかし、これらの語彙を知っている人が「かたつむり」「ほうれんそう」「リモコン」「水筒」といった言葉を知らないはずがない。つまり、ある特定の年代で獲得した語彙は、次の年代でリセットされるわけではなく、すでに獲得した語として引き継がれていく。日本で出版されている小学生を主たる対象とした国語辞典に収録されている語彙数はおおむね２～３万語である。大学生なら全てとは言わないが、このうちの８割は知っていると考えると（事実、君たちなら知っているはずの語がほとんどだが、ときどき奇妙な語が混じっている）、平均して日本人の大学生は２万前後の語彙を持っていることになる。フランス語の場合もおおむね同じで、11歳程度までを対象とした子供用仏仏辞典の収録語彙数は平均して２万語である。フランス人の大学生がこれらの語の全てを知っているとは限らないので、８割程度は知っていると考えると、１万６千語となる。もちろんこれらの数値はもっと別の観点から厳密に研究する必要があるが、おそらくそんなにかけ離れた数値が出てくることはないだろう。

そうなると、大学生を主たる対象とした辞書において、３千から４千語程度の語彙に重要度や基本度に応じて＊をつけるということが、いかに難しい作業であるかがわかる。フランス人の大学生なら知っているであろうと思われる１万６千程度の語彙を４分の１に圧縮するわけだから、どうしてもブレが生じてしまう。

フランス語の＊付き単語

以上の考察に基づいてフランス語の辞書を眺めてみると、基本語も重要語も規準がぶれているように思える。たとえば、大学生ならこれくらいの語彙は覚えておいてほしいと思う、environnement（環境）、といった語にはほとんどの辞書で＊がついてないし、フランス人なら子どもでも知っている、escargot（かたつむり）、という語にもなぜかほとんどの辞書で＊がついていない。フランスに留学したり旅行した学生は、たいてい一度くらいはエスカルゴを食べてくるというのに！

他方において、今どき、このような職業の人はほとんど居ないのではないかと思われる dactylo（タイピスト）とか、優先的に覚えるべき単語は

ほかにもいくらでもあると思うのだが、なぜかsemelle（靴底）などという語に、しっかり＊がついている。靴底って、そんなに重要な単語かなぁ……。もちろん、フランス人なら子供でも知っているはずだけれど。あるいは１年間フランスに留学したとして、se repentir（罪を悔い改める）などという表現を使う機会はあるんだろうか。私は今までにこんな単語を使った覚えがない。

逆に、フランスで出版されている６～７歳程度までの子供向けの辞書（先ほど言及した辞書よりさらに小さな子ども向け）ではどれを見ても掲載されているのに、日本の辞書には全く＊がついていない語として、dauphin（イルカ）、pirate（海賊。パイレーツですな）、grotte（洞窟）などがある。おそらく絵本などに出てくるのだろう。我が家の３歳の男児でさえ、ホオジロザメだの宇宙人だの岩山などという言葉は知っている。全部、絵本に出てくる。

辞書の中の星々

ことほどさように、「重要語」、「基本語」と称して＊をつけるという作業は難しいのである。それはあたかも宇宙の中で星にたどり着こうとするようなもので、大きく明るく輝いているから、近くにある星とは限らないし、自らは輝くことのない星（惑星）がすぐ近くにあることだってある。今の私には辞書の中の＊はこのような印象である。＊がついているので、すごく大切そうなんだけれど、この年になるまで使った覚えのない、遠い＊や、比較的よく見かけるのだけれど、自ら輝いていないので（＊がついていないので）、つい見過ごしてしまいそうな語など……。時間があるときに、辞書の中の天体観測なんてどうですか？

D.H.ロレンスの動物の描写について

経営学部
山田　晶子

D.H.ロレンス（D.H. Lawrence 1885-1930）は、その多くの名作において動物を登場させている。馬や蛇や狐や鳥等の動物たちは、題名そのものになっている場合が度々あり、動物が人間の主人公と同じ位重要な位置を占めているのであり、ロレンス文学の主題の核となって関わっているのである。今回は馬と狐を取り上げて、作品中におけるその意味を紹介してみたいと思う。

【馬】

『恋する女たち』（*Women in Love* 1920）における第９章「炭塵」（Coal Dust）に登場している汽車を恐れる馬の描写や『虹』（*The Rainbow* 1915）における第16章「虹」におけるアーシュラ（Ursula）の新生の１つのきっかけを作っている馬の群の描写は、ロレンスの作品の中でも特に有名な動物の描写である。また『チャタレー卿夫人の恋人』（*Lady Chatterley's Lover* 1928）の第１稿である『最初のチャタレー卿夫人の恋人』（*The First Lady Chatterley's Lover* 1944）においても白い馬と黒い馬が登場して、女性主人公コニー（Connie）の内面を表現するのに用いられている。

ロレンスの作品における以上のような馬の登場は、それらの小説の１要素であるが、後期の中編小説『セント・モア』（*St Mawr* 1925）においては作品の題名そのものが馬なのである。“St Mawr”はウェールズ語であり、「偉大なもの、素晴らしいもの」という意味である。この意味の通り、主人公ルウ（Lou）が心を寄せるセント・モアという黒馬は、ロレンスの神の顕現となっている。その神とはキリスト教の神ではなくて、異教の神であり、その特徴は「目に見えない火」、「大きく燃